

<https://www.pikaramagazine.com>

「災害はしばしばジェンダーに基づく暴力を悪化させる」

カルメン・グラウ・ヴィラはバレンシア出身の防災専門家で、早稲田大学の研究員。博士論文のテーマは、地震、津波、原発事故における日本女性のレジリエンス。私たちは災害管理において日本から何を学ぶことができるのか。

文：マティルデ・ゴデロ

日付：2024年6月11日



画像のキャプション 2011年の地震、津波、原発事故後の双葉町(福島)の復興について調査するカルメン・グラウ・ヴィラ。

ジュカル流域では、私たちは両親から「パンタナ」のことを聞かされて育ってきた。バレンシアでは、**1982 年 10 月**のトウス・ダム決壊のことをこう呼ぶ。私の妹は生後 **10 カ月**で、インタビューに答えてくれたカルメンはまだ生まれていなかった。

バレンシアの街を訪れ、トゥーリア川の古い河川敷を歩いたことがあるだろうか。そう、あの細長い公園は、もともとは川が海まで続く最後の区間だったのだ。**1957 年 10 月**（そう、あの時も **10 月**だった）、バレンシアの大洪水が首都を水没させるまでは。その結果、川をバレンシアから南へ流域を移動させることが決定された。

周期的に繰り返される災害がある。ここでも、東京でも。

「災害後のプロセスは非常に重要で、各メカニズムが連携して作動する必要がある。ケア不足や感染症によって新たな犠牲者が出る可能性もある」

カルメン・グラウ・ヴィラ(Tavernes de Valldigna、**1984 年生**)は、バレンシアの災害管理専門家であり、日本の早稲田大学の地域社会と危機管理研究所の研究員でもある。マドリード・コンプルテンセ大学で現代史の博士号を取得した彼女の論文は、**2011 年 3 月 11 日**に福島で起きた地震、津波、原発事故など、**20 世紀から 21 世紀**にかけて日本で起きた災害における日本女性の回復力に焦点を当てている。カルメンは当時すでに東京に住んでいた。**1996 年、9 月 11 日**にヴァカ川が氾濫して彼女の村を襲った。その時、彼女は自然災害に対する疑問と回答を探索しようと決心した。

グラウ・ヴィラは現在、日本の大学やスペインで講師を務め、ラテンアメリカやアメリカのメディアや研究センターと共同研究を行っている。著書は数々の賞を受賞し、多くの言語に翻訳されている。

彼女は **1 週間**もパソコンに釘付けになっている。

『[Climática](#)』誌に[掲載された記事の中で](#)、あなたは多くの犠牲者を出す災害の段階について言及しています。私たちは今、どの段階にいるのでしょうか？

私たちはまだ緊急事態の段階にいる。被害者支援、救助、遺体の取扱い、そして同時に、瓦礫の撤去とライフラインの復旧を優先しなければならない。一刻も早く。また、ホームレス、負傷者、病人、社会的弱者を避難させることも不可欠である。緊急段階は、多くのメカニズムを同時に導入する必要があるため、非常に重要である。ケア不足や感染症によって新たな犠牲者を生む可能性があるため、非常にデリケートである。

「日本では、死者と行方不明者は毎日数えられている。たとえ 1 時間ごとにその数が更新されることに心が痛むとしても。」

この災害への対応グループは今、何に関心を持つべきか？

州レベルなのか、地域レベルなのか。あまり明確ではないし、その点が問題だ。私が持っている情報では、外から見たイメージでは、対応を主導する明確なグループは存在しない。さらに、残念なことに、運営はいまだに政治化されている。市民、特に被災者は、信頼していたのに見捨てられたと感じないようにする必要がある。政治が脚光を浴びすぎている。発表やニュースは、国の大統領が州知事を非難する、あるいはその逆のようなものではなく、調整や手順に関するデータや説明であるべきだ。ニュースでは、行方不明者の数を伝えるべきだ。たとえそれが後で修正されるとしても。

死者の数は増加の一途をたどっており、行方不明者の数は公式には発表されていない。この点に関して、あなたの経験からどのようなことをお勧めしますか？

透明性の欠如は、家族にとって大きな不安要素である。スペインには国勢調査がないかのような印象を与える。国外からは理解しがたい。年齢や性別など、死者の情報について何もわからないことも理解できない。まだ救出、搜索作業が続いているのはわかるが、重要な情報はすでに入手可能なはずだ。例えば、日本では、2011 年、2020 年の洪水、そして今年 1 月 1 日の大地震のいずれにおいても、死者・行方不明者は毎日カウントされている。たとえ 1 時間ごとにその数字を更新することは心が痛むとしても、すべて重要なことなのだ。危機の時代には、現場にいる人々が情報を入手し、詳細な情報を得る必要がある。組織レベルでは、貴重な時間と

労力を無駄にしないためにも、こうした現象に対処するための手順が必要だ。

今回の震災に関する報道で印象に残っていることはありますか？

いろいろある。「もっと事実を、もっと政治的な発言を、もっと人々の声を知りたい。私はジャーナリストでもあり、センセーショナルな見出しを読むのは恥ずかしい」。

2011 年、私がすでに東京に住んでいた頃、スペインの新聞が「日本の黙示録」という見出しをつけ、私たちが経験している災害について言及していたのを覚えている。外から見るとそれほど深刻には見えないが、中にいると、このセンセーショナリズムは共感の絶対的欠如のように感じられる。最近読んだ『**El infierno en Valencia**』もそうだ。何の貢献もしていない。例えば被災地パイポルタの市民が読んでも、何も面白くない。

一方、この 1 週間、子どもたちの消息が気になり、探している。子どもたちはどこで、どのように過ごしているのだろうか。震災が起きたのは放課後で、子どもたちは家に帰ったり、親と一緒に移動したりする時間帯だった。みんな無事なのだろうか？ 移民コミュニティはどうなっているのだろうか？ バレンシア、特にこれらの村には多くの移民コミュニティがあり、彼らもまた影響を受けているだろう。



2016年の熊本地震からの復興を調査するカルメン・グラウ・ヴィラ。

数字に戻る：なぜより現実的な問題が公表されないのか？ヘルプポイントはどこにあり、被災者は何を必要としているのか？この情報は公表される必要がある。例えば火曜日、私はバレンシアの公共ラジオ局『À Punt』のインタビューを受け、被災した家族や友人に何が必要かを尋ねた。彼らは私に、瓦礫を片付け、できるだけ早く学校を開いてほしいと言った。メディアは、敬意を持って、思いやりのある人道的な方法でこの情報を伝えなければならない。解決策を提示し、できるだけ多くの声を届けなければならない。「子どもたちはどこでどうしているのか。震災当時は放課後だったが、子どもたちは無事か？」

この災害がもたらすより大きな弊害や予期せぬ結果を避けるために、我々は現段階でどのような点に注意を払うべきなのだろうか？

我々はまだ初期段階にあり、データが不足している。瓦礫の撤去が完了し、死者が確認され、最低限のサービスが復旧すれば、村は長い復興プロセスを開始することになる。日本の経験では、村の住民を失わないためには、迅速な行動が必要だが、合意のもとに、新しいコミュニテ

ィを構築する必要がある。

「私は、女性弱者であるというテーゼで解体を目指した。そして、震災のあらゆる局面で、目に見えず、追いやられた、女性のリーダーシップと生存者に出会った。」

しかし、すでに極限状態で活動している援助チームは、まもなく限界に達し、疲れ果ててしまうだろう。彼らを休ませ、同時に支援も維持できるような救済措置が重要だ。外部からの専門的な支援は、そのための良い解決策となる。より多くの努力が必要だが、そのようなサポートは仕事をスピードアップさせると私は思う。スペインは今日、世界の注目を浴びており、多くの同盟国を持っている。これを利用しない理由はない。津波の後、日本が受けた国際的な連帯は、復旧・復興プロジェクトへと姿を変え、最終的には地域社会の改善につながった。スペイン国外では、私たちの共同体は多くの観光客を惹きつけ、愛されているのですから。

このような危機管理における地域社会の女性の役割について研究されていますが、彼女たちは伝統的にどのような役割を担ってきたのでしょうか？

昔から女性は傷つきやすいと言われてきた。しかし、子供の頃、そしてその後日本やラテンアメリカで経験した緊急事態の経験は、私にそうではないことを教えてくれた。私は論文を書きながら、この状況を打破しようとした。そして、目に見えず、追いやられながらも、災害のあらゆる局面に存在する、女性のリーダーシップとサバイバルの実際のモデルを発見した。私は今、このような実在の事例をまとめた本を執筆中である。私は、これらの事例が多く、貴重な戦略を提供してくれると信じている。女性には、非常時に発揮される本質的な強さがあり、それは災害を乗り越えるための基本的な柱となる。

パイポルタの被災地を歩く 2 人 / Eva Mañez



女性は特別な結果に見舞われるのか？

しかし、それについて語られることはほとんどない。災害はジェンダーに基づく暴力を悪化させることが多く、それを防ぐ必要がある。私は女性、少女、思春期の少女に対する暴力を非常に懸念している。**2010** 年のハイチ地震や **1995** 年の日本地震など、危機の最中の女性の被害について多くの例がある。神戸の暗い通りが毆となった。従って、このようなことが起こりうることを考慮し、予防策を講じ、女性がニーズや問題を表現できる安全な空間を開くことが必要である。被災した村に女性兵士や警察官、市民警備員を配置する、被災地のヘルプポイントやホットラインの近くに情報・苦情窓口を開設する、などである。

生存者が平穩を得るためには何が必要なのか？

バレンシア州政府が被災者に 6 千ユーロの援助を行う予定であると読んだ。多くの市民が一刻も早く家や事業を再建する必要があるからだ。その上で、被災者への援助全体をどのように組織していくかを考えなければならない。一方、被災者の方々は、子供たちがすぐに学校に戻れるように、雇用やビジネスの支援、心理的な支援など、私たちの持続的な支援を必要としている。また、自分たちの広場が再びきれいになるというような簡単なことでもある。若者たちが示す連帯感は、とても心温まるものだ。

日本ではどのように受け止められているか？

日本は注視しており、ここ数日、国王や大統領がブーイングを受けている映像をテレビ報道があった。メディアもそれに呼応している。私の周りの多くの日本人は、バレンシアの人々に共感を示している。

日曜日にペドロ・サンチェス国王夫妻とカルロス・マゾン国王夫妻がパイポルタを訪問したが、このような訪問は、たとえ拒否反応が出たとしても、重要なことだと思うか？

時期が悪かった。早すぎた。近隣住民の反応がそれを証明している。最も必要な支援をしなかったのだ。隣人たちは助けを求めて泣き叫んでいた。映像では苦悶の表情を浮かべている。公式訪問は、もっと後の段階で歓迎されるものだ。日本では、2011 年に菅首相が事故後に福島を訪れ、激しい批判を浴びた。日本人は忘れていない。天皇陛下はより慎重で、ずっと後になって被災者を訪問した。

「移民コミュニティを攻撃し、犯罪行為のせいにすることは、世界的な災害の歴史ではよくあることだ」。

バレンシア州政府の代表者は、行方不明者の家族が情報を待つのに最適な場所は自宅であると述べている。あなたは思うか？

日本ではこのような発言は辞任につながる。別の例を挙げよう。2011 年の津波による行方不明者の捜索は何年も続いている。亡くなった人の衣服が回収され、身元が確認されたこと

がニュースになったこともある。どの文化圏でも、親族にとって「行方不明」という言葉は恐怖である。適切な終結が必要なのだ。スペインでは死が隠されている印象がある。パンデミック(世界的大流行)の際にも、私はそれを目の当たりにした。今般の水害の犠牲者を黙って見過ごすわけにはいかな い。

このような危機に際して、専門家の知識が責任ある人々に届きにくいのはなぜだと思うか？

危機に対してもっと中長期的な計画が必要だ。危機が発生し、私たちを不意打ちするのを待つのではなく、危機に対する中長期的な計画が必要なのです。国連は何十年もの間、防災と管理に取り組んできた。それを私たちの国、地域、地方の領域に移し、適用することが問題なのだ。専門家のネットワークを構築し、いざというときに備え、行動する。

災害時の偽情報について研究したことがあるか？

そう、残念ながらこのようなケースは常にあり、深刻な結果を招きかねない。だからこそ、さらなる憶測を生まないよう、透明性を強化しなければならない。危機の時代には、人々は説明を見つけ、これからどこへ向かうべきかを知るために、知り、自分自身に情報を提供する必要性が大いにある。信じられないかもしれないが、私たちは非常に傷つきやすい。不幸なデマが導火線に火をつけることもある。移民コミュニティを攻撃し、犯罪行為のせいにすることは、世界的な災害の歴史ではよくあることだ。現在では、ネットワークを通じて、噂を広めることが容易になっている。別の例では、行方不明者の数がわからないと憶測が増える。

政府とは別に、危機対応で鍵となるセクターや組織は？

NGO は、その専門知識と地元の草の根的な基盤により、対象住民のニーズと密接に結びついている。彼らは資金を集め、迅速に行動する。ボランティアがいなければ、あらゆることに多くの費用がかかる。彼らは介護、掃除、食事などの負担を軽減してくれるし、何よりも被災者を慰め、一緒にいてくれる。新たなコミュニティ支援ネットワークが構築される。

学校で防災を取り入れるべきか、日本ではどうなのか？

ためらうことなく。私の経験では、これは非常に重要であり、命を救うことが証明されている。日本の子どもたちは**3歳**から、洪水や火災を含むあらゆる災害時にどのように行動し、身を守り、避難するかを学ぶ。この学習は、教師が教室でシミュレーションや物語、ゲームなどの教訓的な方法で取り入れている。私はこれをスペインの教室で、そして母国で開催されることを願っている！